

第二十九章 亀裂

大福体制による党内の一本化は、有権者の間での安定志向の増大と相まって、参議院議員選挙だけでなく、各種の選挙に威力を発揮した。この年（昭和五十二年）に行われた二つの参議院補欠選挙と七つの知事選で自民党は完勝し、また参議院選挙と同時に施行された東京都議会選挙でも、野党の自民、新自由クラブが躍進して（合計十五議席増）、保守が過半数を占めた。美濃部与党の社会、共産両党は大きく後退（合計十五議席減）した。この他、各地の市長選でも革新の後退がいちじるしかった。

こうして、福田は総理・総裁として、大平は幹事長、そして次期総裁候補として、その評価を確立して行く。だが、まさにその時期に、大福体制の中心部に微妙な変化が生じた。

まず、登場したのが「解散論」である。福田首相は参院選勝利の直後から、「総選挙は福田の手で……」と冗談めかして発言していたが八月上旬の東南アジア歴訪を前にして、大平に、「解散をやらせてくれないか」という希望を表明した。

福田の論旨は次のようなものであったろう。すなわち、参議院選挙で逆転を阻止し、地方選挙で勝利が続いているからといって、衆議院における与野党伯仲状況は解消されているわけではない。もしいま、大福体制による党内の結束と保守復調の勢いを利用して総選挙を行えば、うまくすれば十五議席、少なくとも十議席

は自民党の衆議院内勢力を増やし、政局の安定をはかることができるではないか。

しかし、大平幹事長は、福田首相の解散論に反対の意向を示した。予算委員会が逆転委員会だからと言って、最大の国事である衆議院解散を、新たな政策を打ち出すこともなく、自らの党の都合だけで断行するわけには行かない。国民の前に明らかにする名分のない解散をやれば、決して国民からの支持を得られないだろう。それに、党はいま参議院選挙で全力を使い尽くして疲れ切っているし、選挙資金も乏しい。議員は、前年末の任期切れ選挙で血を吐く思いで当選してきたものばかりである。一年もたたないのに解散とは、あまりにも非情ではないか。これが大平の言い分だった。

結局、このときの福田の解散要請は、党をあずかる大平幹事長の消極論によって深刻な話にまではいたらなかったが、福田の解散論の背景には、もし総選挙によって、自民党が勝利を収めれば、福田政権が国民から信任されたことになり、それがひいては、二年で政権を交代するという大平との間の密約の拘束力が弱まるという期待があったとも考えられる。福田自身の思惑はともかくとして、福田周辺では、福田が二期四年、あるいはそれ以上、総裁をつとめるのが当然という空気が濃かったという。おそらく、福田は、密約の内容を何らかのかたちで周辺に伝えることをしなかつたのであろう。福田のある側近のちに、「私は密約については全く知らなかつた。私は福田さんが再選後一年で大平さんに政権を譲り、そのあと大平さんが三年やるという、いわゆる『大福表裏六年説』をとっていたが、それは、多くの側近から異端視されたほどだった」と語っている。

一方、この頃から、『出直しの党改革』の目玉である全党員、党友の参加による総裁公選予備選挙の実施が世間の注目を集めはじめ、秋も深まった十月末、福永健司委員長らの手によって実施細目が決まった。予備選挙の実施時期は、一年後の翌昭和五十三年十一月一日の告示、二十七日の開票が決定した。この予備選挙で二人の総裁候補者を選び、衆参両院議員による本選挙で総裁を決定するというものである。しかし、この

時点では福田と大平がこの予備選挙で争うのか否か、大福体制が今後どうなるかについては、誰も確たる見通しを持っていなかった。

福田首相は機会あるごとに「大福一体」、大福水ももらさず」と大福関係の密接さを誦いあげ、一方、大平幹事長も「大福が争うことはない。大福が戦うような余裕は、今の自民党にはない」と福田首相と口調を合わせ、大福の対決を否定し続けていた。

臨時国会も終盤近くなった十一月中旬、発足後満一年の折返し点を迎えた福田内閣の改造問題が日程にのぼった。マスコミは、この改造人事についても一年後の大福関係をめぐる政局を占うという観点から注目した。

改造の焦点は、党三役と官房長官の人事であった。大平は、江崎総務会長、河本政調会長は、人間的にも親近感の持てる人であると考えており、三役間のチームワークもよかったので変更する意思はなかったが、福田首相の周辺からは「中曽根を三役に起用したい」という意向がもたらされた。

大平は、福田首相が二期二年で終わるならば、この改造は政権にとつて最後の人事となるのだから、大福体制の建て前から言っても、なるべく福田の意向を尊重したいと考えた。二十七日午前十時から野沢の福田首相私邸で二人だけで四時間半にわたって行われた福田・大平会談では、党、内閣の全人事が検討され、この日、大平幹事長、中曽根総務会長、江崎政調会長という党三役のほかに、全内閣者が内定した。翌二十八日、閣僚名簿の発表が行われたが、官房長官には、強く意欲を燃やしていた安倍晋太郎が就任し、團田は外相に転じた。蔵相には大平派から村山達雄、通産相には政調会長だった河本敏夫、経企庁長官には宮沢喜一が起用された。また翌年一月の定期党大会で船田中を副総裁に選任することが内定した。

マスコミの多くは、人選で福田首相がポイントを挙げたとか、大平幹事長がどのように抵抗したかといった大福対立の図式の中でしかこの人事を解釈しなかった。中曽根の総務会長起用については、福田が大平の

党独占体制に楔を打ち込んだ、という解釈で報道された。大平幹事長は、「事実と違っていても、マスコミで報道されることによって、それは事実として独り歩きしはじめる。そういう意味では、歴史的事実とは、現実と報道との間に形成されているものだ」という感想をもらし、内閣改造の意義について、「この改造の最大の前提は、大福体制の確認であった。マスコミは、この点を忘れて……」と不満を表明した。

マスコミがいったん大福対立の図式を報ずると、それぞれの派閥もこれに影響されて、対立意識を助長することとなった。福田派が現職総裁の再選を目指し、大平派が大平の総裁就任、念願の大平政権誕生を望むことは当然と言えた。

こうして政局は、ここから表層と深層の二つの流れに分かれて進行することとなる。

表層は言うまでもなく、一年後の総裁公選をにらんだ動きである。深層は、密約をめぐる大福間の関係であった。福田が、政権の座にあるものが必ず抱くようになる使命感と周辺の動きに押されて、再選への希望を次第に強めてきたことは十分に想像できるが、大福密約の縛りがかかっている以上、大平の同意なしに再選、あるいは福田政権の任期延長を公言する立場にはなかった。しかも、大平は大福間の紳士協定を誠実に履行し、改造についても福田の意思を尊重してくれた。そこには、福田の方から密約を一方的に破棄すべき口実はない。またかりにそれを強行して総裁公選を大平と争ったとしても、党内基盤の劣勢な福田が勝るとは考えられない。

したがって、福田が再選を果たそうとすれば、大平を説得して密約の内容を変更するか、総選挙に打って出て勝利を収め、自らの立場を強化して密約の拘束力を弱める以外にはない。しかし、総選挙を実施するにも、党を任せている大平の合意が必要であった。

こうして政局は、表層では対立、深層では話し合いという流れが、時に相交わり、時に相反しつつ、しかも相互に影響を与え合うという、きわめて判りにくい様相を呈するようになって行く。

新しく決まった予備選の投票権は、最低、五十二年度と五十三年度の二年間、連続して党費を払った党员と、五十三年度の会費を払った党友とに与えられるという規定となっていた。そして五十二年度の党员の入党締切り期限は五十三年一月末であった。予備選が行われるかどうか半信半疑であった党内でも、改造が終わって十二月に入ると、党员獲得をどう進めるべきか、各派に落ちつかない空気がかもし出された。

この頃、竹下登委員長を中心にした全国組織委員会は、「貴方も総裁が選べます」というキャッチフレーズのもとに、百万党员獲得を目指してフル活動をしていた。これまでの自民党党员が四十万名程度であるから、一挙に二倍以上にしようというのである。党内の多くはこのPRRを誇大宣伝と受け止め、せいぜい五十万から六十万名ぐらい獲得できれば上乘と見ていたが、年末になると各派の動きは急速に熱気を帯びたものになってきた。

こうした中で、大平派では鈴木善幸前農相が閣務に専念することになった。鈴木は、密約文書の立会人の一人としてその間のいきさつを熟知しており、またこれまでに政治抗争の舞台を何度も潜ってきた老練な政治家であった。理想家肌の大平を力パ―するのにもってこいの人材で、総裁公選に臨むうえで理想的な配置であった。

各紙は動き出した予備選をめぐる政治企画を連日のように紙面に載せるようになった。さらに、中曽根総務会長、河本通産相が出馬の動きを見せはじめたことも、マスコミの関心をそそりたて、党内には、動きが日増しに色濃くなって行った。それに伴い、入党締切り期日は二月末まで延期され、昭和五十三年一月十四日現在で四十七万九千七十九名であった党员数が、竹下組織委員長によると、「最終的には百万党员も夢ではない」という状況となった。

一月末から二月に入る頃になると、各地方県連から連日、二万、三万という大量入党の申込みが党本部に届けられ、二月末日締め切られた党员党友の数は、党员が百三十三万一千人、党友が十八万一千人、投票権

を持つ国民政治協会員が四千八百人で、合計約百五十一万七千人に達した。一カ月間に百万人近い黨員が入党したのである。こうなると、その派閥別分類、浮動票の数だと、その内容を正確に知るものは誰もなく、単に派閥に系列化されていることが明らかな黨員党友数だけで優劣を断ずるわけには行かなくなってしまうた。

二月十八日、大平幹事長は自民党香川県連臨時大会に出席するため故郷へ帰った。大平を迎える大会は熱気にあふれており、「大平総裁の実現を望む決議文採択」の動議が満場一致で決議された。「大平総裁」を望む香川県連の黨員獲得運動は、この頃目標を大幅に上回り、三万七千人を超えるほどになっていた。

大平はこの席上で「総裁公選は党の命運をかけた大事業である。……だが総裁の座につくかというより、公正に行われることが大切である。幹事長として、このため全力投球している」とあいさつしたあと、自分の去就については、「時期がきた段階で、党のため、天下のためを判断して自ら天に問うて去就を決めたい」と述べた。この時の報道の中に、「大平氏、意欲を示す」というものもあつたが、多くは「迷惑顔の大平氏」という印象を見出しに掲げた。それは、表と裏のディレンマに悩む大平の姿をあらわすものであつたと言える。

他方、この頃になると、大福間には、政策運営上の違いもあらわれはじめた。

福田内閣は、世界経済の停滞を打開するため、わが国が世界経済の三つの「機関車」の一つとしての責任を果たすため前年（昭和五十一年）、三月の日米会談で「七％の経済成長を行う」と表明していたが、この時期、日本経済は依然として低迷状態を続けていたため、この数字は五十三年度の予算編成時に当然問題となり、その達成が可能かどうかについて政府部内でも論議が出はじめた。

福田首相は「七％はあくまで努力目標を示したまでだ」としていたが、大平幹事長は一月十八日、日本経営者連盟での講演で、「七％成長をやると政府が明言したから先の日米交渉がまとまったのであり、約束は守

らなければならぬ」と強調した。新聞は、早速これらを取りあげて、「七％達成できない場合の福田首相と政府の責任について間接的な形で言及したものと見られる」と報道した。確かに、このときの七％問題の追及は、いつもの大平に似ず頑強であった。福田側はこれを「大平が政権ゆさぶりのための伏線を張りはじめた」と受け止め、大福間のひびわれは次第に亀裂の様相を呈しはじめた。

ついで第八十四回通常国会における予算の修正劇も、この傾向を助長した。前年の予算で七千億円を超える修正をかちとっているだけに野党の攻勢は激しく、二月十七日には野党五党の政策担当責任者会議では、総額一兆二千三百九十億円の統一修正要求がまとめられた。大平幹事長は、二月十九日午前、党本部の青年部婦人部全国大会において予算修正に言及し、「野党側の要求する所得税減税も含めて、整合性がある限り、現実に対応する」という柔軟姿勢を示唆したが、政府はこの姿勢に強く反発した。首相周辺にも、予算修正に反対の空気が出はじめた。この党内の修正反対論の舞台は、中曽根総務会長が主宰する総務会の場であった。福田派、中曽根派などの委員たちが口を揃えて、折衝に当たる大平執行部の動きを掣肘する空気が大勢をリードするようになり、二年生、一年生議員五十六名も予算修正に反対の署名を行った。安倍官房長官など官邸サイドからは、「予算が修正されるなら解散だ」というような意見が出てきた。

この結果、二十二日には、自民党が全野党一致の修正要求を拒否し、翌日から二十六日まで野党の審議ポイコットで衆議院予算委員会は空転した。大平執行部があえてこういう態度に出たのは、野党五党の結束の程度を探るとともに、国会空転という事態によって、修正反対の党内強硬派を抑えようという意図があったと見られた。

そうした経緯があつてのち、二十四日の午後七時二十分から、与野党幹事長書記(局)長会談が開かれた。いよいよ詰めめの段階である。大平幹事長は「ボクがこれから正確な日本語で説明するから間違えなくて聞いてくれ」と前置きして、予算修正に対する自民党側の考え方を各党に説明した。その大平提案は、要約する

と、政府原案は与野党で一致した分、総額三千四百億円だけを修正する。修正は、議員立法と衆議院社労委員会の決議によって行い、予算書の書き直しは行わない。野党側の要求する減税や福祉の増額といった修正要求はその内容を関係委員会の話し合いで詰める、その結論を秋の臨時国会で補正予算を審議するときに実現する、というものである。大平はこれを「君たちは二階にあげれというが、いまは二階にあげられない。さればといって、君たちの要求は委員会で詰めた上で、後で実行するのだから、全く上にあげられないというのではない。したがって、厳密に言えば一階でもないし、二階でもない、《中二階》である」と説明したと言われる。野党内にも大平幹事長の苦心を諒とするものが多く、社会、公明、民社、共産は表向きは反対したものの、新自由クラブはこれを支持した。

翌二十五日の自民党臨時総務会では、「三役は予算原案の基本的性格を堅持し、予算編成の重点主張を逸脱しないように心得て行つ」という条件つきながら、三役一任が決まり、修正劇は事実上山を越えた。この結果、三月七日夜、五十三年度予算は、年度内成立ぎりぎりのタイミングで衆議院を通過したが、この修正劇の経緯は、派閥対立が再燃しはじめたことを物語っている。

さらに、日中国交回復後の懸案となっていた日中平和友好条約の締結も、大福間の政策上のちがいをあらかずものとなった。中国側が乗り気であることが確認され、機は十分に熟していたにもかかわらず、福田首相は、日中平和友好条約の締結に慎重な態度をとり、党内の条約締結促進派の不満をつのらせた。日中問題は、再び党内の対立の火種になりはじめた。

四月十三日、慎重な福田首相の態度を攻撃するかのようになり、百隻にのぼる中国漁船団が尖閣諸島周辺に突如出現し、日本の「領海」に入ってきた。四月二十一日、中国側は、これを漁撈活動中の偶発事件と説明し、条約調印の障害とならないよう配慮を見せたが、事件は日本の世論を刺激し、党内では「福田首相の指導力

がないからこうした事態を招く」といったハト派と「領海侵犯だ、けしからん」とするタ力派との対立が尖鋭化した。とくに青嵐会を中心とする議員は、日中国交回復当時の外相であった大平幹事長を、総務会で真向から攻撃したが、福田首相はこれに傍観的な態度をとった。なお、のちに、この中国漁船団の尖閣諸島への領海侵犯は、中国内の中日平和友好条約反対分子によって起こされたものと判明した。

この間、京都では二十八年にわたって府政を独占した蟠川虎三知事の引退に伴う知事選挙で府政を革新から奪回するため、自民党は大平派参議院議員の林田悠紀夫を立てることにした。大平は、当初、貴重な参議院の議席を減らすことをしづぶたが、京都出身の前尾繁三郎の懇請もあって、林田候補が実現した。四月九日投票で行われた知事選挙では、大平、前尾らをはじめとする必死の努力で林田は勝利を手中にし、前年から見られた革新自治体の後退をさらに大きく促進した。

こうして予算成立後の四月中旬から下旬にかけて、大福関係はさまざまな事件を織り込みながら、微妙に揺れ動いていたが、中曽根総務会長の動きがこれにもう一つの要素をつけ加えた。中曽根は、ハト派の代表たる大平に対立するものとして、ことさらタ力派的主張を強調する戦略をとったが、それは、同じ体質の福田とは相通じ、そこから、同じ群馬三区を選挙区とする福田・中曽根の、いわゆる上州連合の構想が色濃くにじみ出てきた。これに対して大平には個人的に近い河本との間に接近が見られ、その結果「福中対大河」という二極分化の傾向も隠顕しはじめた。

こうした動きは、福田首相の解散願望を一層強くかきたてることとなった。大平幹事長と決裂してでも解散を断行するか、大福覚書の精神を守り話し合いを行うことに賭けるか。この重い政治的選択を背負ったまま訪米の途についた福田は、帰途に立ち寄ったハワイのホノルルで、五月五日（日本時間六日）同行の記者団と政局懇談を行った。その発言内容は、党内、とりわけ大平陣営に少なからぬ波紋を起すことになった。

首相は、「大福体制は空気の入りこむスキ間もない。私も大平幹事長も、二人が相争わないということが日本の政治にとって最大の課題だ、という点で一致している。総裁選にどう臨むかは暮になって考えればいいことだ。その時になれば、大福が話し合つて対処することになるだろう」と、話し合い「一本化を示唆しながらも、「八月以降は（補正予算で）臨時国会があるかもしれない」と、その国会で解散を行うとも受け取れるような発言を行った。

福田首相のハワイ発言は、大平派が、それまでの大平周辺の禅譲期待路線は維持しつつも、「公選に大平出馬」という旗印を立てて、表舞台での公選対策に乗り出すという二面作戦を取る契機を与えた。五月十日、大平派幹部と同派の若手議員の勉強会である「水曜会」とが合同会議を開き、公選に大平擁立を決議するとともに、解散反対を掲げた。

五月二十五日に帝国ホテルで行われた大平の講演が、マスコミから総裁公選への事実上の出馬表明と受けとられたのを機に、福田首相は大平と話し合い、二十七日、遊説先の名古屋市内で、「公選問題は秋まで凍結し、当面政局の運営に全力を上げる」との談話を発表した。この場に同席した大平も「同感」の意を示し、ここにいわゆる「政治休戦」が成立した。

しかし、国会会期切れを控えて、各派の攻防は一段と活発化し、とくに福田周辺から吹き出す解散風はますます強まった。たまりかねた自民党議員たちは、六月上旬、「名分なき解散には反対」という署名運動をはじめたが、この運動は大平、田中、河本派をはじめ、中間派の議員たちの間にまで燎原の火の如く広がって、放置しておいたら衆議院議員の七、八割にも達する勢いとなった。この解散反対の署名運動が反福田運動に転化しかねない党内情勢に最も驚いたのは、首相周辺である。党内の大勢が反福田に回ったのでは、解散どころか政権の維持も覚束ない。解散風も自重せざるをえなくなつた。

第八十四回通常国会は、六月十六日、会期延長を含め百八十日の会期を終えた。この日昼、国会内で開か

れた党代議士会の席上、大平幹事長はいさつに立ち、「解散権をもつ内閣の首班自身が当面解散を考えてもいないし、その余裕もないと表明している。党はその表明を信頼し、内閣と一体になって政局の安定を図り、政策の推進にあたるべきがその責務である」と、解散問題に絞って議員に語りかけ、「党は、政府が経済の回復と外交案件の処理に周到かつ果敢な措置を講ずるのを助けつつ、党改革の基本精神に基づき、秋に予定された総裁公選を立派にやりとげなければならない。自信と平常心をもって党勢の拡大と政策の研鑽に精進されんことを希望する……」と述べた。

この「平常心」という表現こそ、解散のないことを明確に保証した党内へのサインであり、集まった議員の間から安堵の声があがった。このあと、大平幹事長は、国会終了に伴う挨拶のため、議長公邸に保利衆議院議長を訪ねたが、保利は大平に「君は幹事長として総理を助け、全く間然するところがない。敬服した」と激賞したという。

国会閉幕の翌十七日、福田・大平会談が行われ、総裁公選事前運動凍結が正式に合意された。

この時期以降、十月まで、福田と大平の間には十数回にわたって公式・非公式の会談が行われ、政権問題についての話し合いが行われたが、密約の存在を知らないものは、総裁と幹事長がなぜそんなに会って話し合うことがあるのかと奇異の感を抱いた。表層と深層の流れの違いはますます大きくなって行ったのである。

大平は政治休戦期間中、福田が信義を重んじて立候補を辞退することを前提とした形で、秋の総裁公選を考えていた。福田の方は立候補か辞退か、その心境は揺れていたと思われる。この頃、福田首相は大平幹事長との会談で、「来年のサミットは君にやってもらう」とも「総裁公選にはぼくが推薦人になる」と、二年の任期中大平と交代する含みの発言をしてもいるが、その後、「何らかの方法はないか、君考えてくれないか」とも少し任期中含みを持たせてほしいという意図を明らかにしたり、「ぼくが総選挙をやり、政局を安定して君に渡したい」とも繰り返したりした。

こうして、あやふやながら成立した政治休戦であったが、七月十九日、福田首相が、西ドイツのボンにおける先進国首脳会議からの帰途、ブリュッセルで、「来年の東京サミットでは議長国としての責任を果たしたい」と述べたため、これが再選出馬宣言と受けとめられ、またもや政局は騒然としてきた。

七月二十二日、自民党香川県連大会出席のため讃岐入りした大平幹事長は福田発言に反応するように、支持者を前にして、「時期が来たら天下に公人としての決意を表明して皆さんの判断を仰ぎたい。……私は讃岐に生まれ、讃岐に育ち、讃岐に死ななければならぬと思っっている。私の栄辱は一切讃岐の皆さんと一緒にあるつもりだ」とあいさつした。同二十三日には中曾根総務会長が出馬の意欲を示し、三十日には、河本通産相が立候補の用意があることを明らかにした。

これによって、世間は、福田を含めた四者対立の構図が出来上がったと考えた。もうこの時には前年解消したはずの派閥は完全に公然と復活していた。少なくとも表舞台においては、事実上政治休戦は解除されてしまったのである。

一方、日中平和友好条約締結の機運が盛り上がってきた、これまで条約締結推進に必ずしも積極的ではなかった福田首相も、八月六日、条約締結のために園田外相を訪中させることとした。八月十二日、条約は調印され、その夜、総理官邸の一階喫煙室にセットされたテレビの前に坐った福田首相は笑顔を見せていたが、同席することを求められた大平幹事長はただ黙って福田首相を見つめていた。

日中平和友好条約の調印は与野党大部分の人に歓迎され、マスコミは、「首相は再選に自信」と報じ、福田派内も国民的な反応のよさに気をよくした。この時を境に、政権発足以来、一度も三〇％台を記録したことがなく、前年末には二一％強だった福田内閣の支持率が上昇に転じ、九月には二七％にはね上がった。

しかも、大福間の政治休戦は予期しない政治的効果をもたらしてもいた。安定した大福体制に対する評価

が党内に高まるにつれて、党員の間にも「大福体制を変える必要はない」という意見が強まり、大福による話し合い調整を望む党員を増大させていたのである。さらに石油ショック後の景気不振も底をつき、ようやく明るい兆しが出始めていた。五月末、政治休戦に踏み切った当時と比較して、情勢は福田再選にきわめて有利に展開しはじめていた。この背景には、総理・総裁と幹事長という立場の差も関係していた。すなわち、政策上の成功はすべて総理に帰せられるのに比して、幹事長は、結局は政権の女房役であり、その成功は、ほとんどがやはり総理の功績に帰するということである。

八月二十二日、前年に引き続いて自民党の第二回夏季研修会が箱根で開催されたが、大平が、その講演で、政府・党内で防衛論議が高まっていることを取り上げて、「バランスを踏みはずさない政治」を強調したのに対し、中曽根総務会長は、「国家の権威の確立」を訴えた。また、福田総裁は、「総裁選挙には党の命運がかかっている」と、引き続き政権を担当する決意とも見られる挨拶を行った。

ロッキード事件以来、政界の後景に退いていた田中角栄は、ながいつき合いから、大平の心理を手にとるように理解しており、八月下旬、大平に極秘裡に会談を申し入れた。大平はこれを受け、会談の場所として特に、大平・田中の二人にとって政治的恩師とも言うべき故池田勇人の信濃町の私邸を指定した。この会談で大平は田中に、福田との話し合いの過程を説明すると、田中は、「キミは落ちもしない手形を後生大事にかかえている」と、福田再選出馬が確実であると断定し、彼自身が作成した予備選挙と本選挙の票読みの結果を示した。それは、予備選挙では大平は一位になれないが、本選挙で三百八十名の国会議員のうち、過半数を獲得して勝てるというものであり、大平自身の分析とも一致していた。

田中は大平に、もし大平が予備選挙で福田との差が小差で二位となるならば、本選挙で必ず大平を当選させられるという確信を述べ、十一月一日告示の予備選の日程、郵便による投票等を助案すると、行動の開始は遅くとも十月十日でなければならぬと大平に奮起を促したという。

池田邸から帰ってきた大平は、側近に「今日は角栄に叱られてきたよ」ともらした。

なお、この田中との会談の前後に、大平は、大福関係を心配した保利衆議院議長との会談も行った。

八月末、五十三年度党費納入が締め切られ、総裁公選予備選の投票権者は、黨員、党友あわせて百五十余万人と確定した。大平が「二年後のことは二年たったらまたその時に話しましょう」と大福提携合意の際に語った「その時」、あと二カ月には迫っていた。

予備選の有権者登録が締め切られた時点で、マスコミはさまざまな工夫をこらして百五十万黨員党友の動向を探った。各種の世論調査が行われたが、福田内閣の支持率上昇もあって、福田首相の優位を示すものばかりであった。こうした情勢の変化を受けて、大福会談に臨む福田首相の姿勢は微妙に変化して行った。

決戦必至の客観情勢に、宏池会事務局では、秘書団を中心とする選挙態勢の準備を進めたが、大平は「その無理をするなよ」と抑え、「十一月になったら、様子が変わるかも知れんぞ」とポツリと言った。大平は、ここまできてもまだ福田との信義が守られることを期待していたのである。

しかし、九月に入ると、大平の周囲に「話し合いによって首相が下りるなんて見方は甘い」とか「相手には怒りの色を見せることさえあった。二年前の紳士協定を相手に守らせるには、まず自からがその協定の精神を遵守して、精いっぱい尽くす以外にない。しかし、そのことがいま逆に相手が協定を守らない方向への動きを強化している。日頃温厚であり、たいいていの悪口や冷やかしには笑って応える大平ではあったが、よほど心に鬱屈するものがあつたのである。」

この年の正月、大平邸を訪れた旧学友の一人に大平が語った言葉は、この頃の彼の心境をよくあらわしている。

「俺も、思わざる道に入り、幸いいろいろなことをさせてもらった。これからあとやるべきことは、一つしかないと思う。そのやるべきことも、せひにも自分で求めてやることではない。皆さんに『やれ』と推されてやることで、『やるな』とおっしゃるのであればやめる。でもその時は、ある先輩のように老いの漢をたらしながら、うろつろと老醜をさらすようなことはしたくない。やれといわれるなら渾身の勇を奮って、個人の利益はもちろん、党の利益に煩わされることなく存分に良いことを成し遂げたい。それには及ばぬというのなら、この機会に公職を辞したい。おかげ様で子供たちも成人したし、老後の夫婦二人が何とか食っていける身にもなった。俺には今後やりたい別の道もあるので辞めたいと思う。その二つの道の決断が、今年の末頃と考えられる。だから今年は、俺の人生で最後の決断の年だと思っている」。

またこの時期、大平は「総理大臣にならなくても、小村寿太郎、陸奥宗光、西郷隆盛などのように立派な仕事をして歴史に名を止めた人がいる。政治家は、何になるかが問題ではなく、何を為したかが問題なのだ」と何人かに語っている。おそらく大平の胸中には、党の統一と政局の安定のためには、場合によって密約が守られず、自分が総理・総裁となれなくても、信義を尽くして行く以外にはないのではないかという思いが去来していたにちがいない。

『進退は天に問い、栄辱は命に従う』 大平は、人生の大きな岐路に当たって、つねにこの言葉を掲げてきた。四十七年の初の総裁公選への出馬のさいにも、また、二カ月前の郷土の支持者を前にした時にもこの言葉を口にした。いままた最大の選択の時に当たって、『進退を天に問い』その栄辱については『天命に従おう』、それが大平幹事長の心境であつたらう。

第八十五回臨時国会は昭和五十三年九月十八日に召集された。最大の懸案は補正予算の審議であつたが、その中には、春の予算修正で与野党間に成立した合意を盛り込まなければならなかつた。この時期までに、

世論調査等による福田優勢という情勢の中で、福田は解散強行の意思をかなり薄れさせてはいたが、補正予算問題で臨時国会が相当難航することを予想した福田周辺は、場合によっては「冒頭解散」を行う準備もしていたという。大平はその危険を知りつつも、自らが当初予算成立の過程で野党との間で行った合意をこの補正予算に反映すべく努力した。

社公民三党は、臨時国会を前に一兆円減税要求をかけた、補正予算の組替え動議を衆議院予算委員会に提出する動きを見せた。しかし、新自由クラブ内には大平執行部の姿勢を評価する声が高まっており、野党共闘で対決姿勢を強めるよりも、自民党に迫って大きな譲歩を得る方が、党の存在をPRできるという現実論が強かったため、大平は西岡幹事長との折衝の中に、打開の道を求めていた。結局、政府提出の補正予算案は無修正のまま、自民、新自由クラブの賛成で成立した。最も緊張したせめぎ合いの場面は、こうして大平幹事長が巧みにしのぎ切った形となり、解散の可能性は、これによってほぼ完全に終息した。

総裁公選の告示が行われる十一月一日を一カ月後に控えた九月末から十月上旬にかけて、大平の心理や福田・大平会談の成行きとは別に、宏池会の国会議員や秘書団は、情報の分析に全力をあげた。予備選が国会議員による本選挙のために二人の候補者を選出する制度であることはすでに述べたが、その方法としては、「持点制度」というこれまでどの選挙でも経験のないやり方がとられることになっていた。「持点」とは、各都道府県単位で有権者千人当たり一点の計算によりあたえられる点数のことである（千人未満は切上げ。例えば、有権者が五万九千六百六十四人いる北海道は持点六十点）。この持点を、有権者の投票によって選出された上位二人が得票の比例配分によって獲得し、三位以下には配分されない。こうして各都道府県単位で計算された候補者別の持点を全国集計し、上位の二人が国会議員による本選挙で争うという仕組みであった。

「大平側が予備選で福田との差を百点以内に押さえてくれたら、本選挙で逆転する自信はある。しかし点

差が三桁になると逆転は難しくなる」というのは盟友田中の考えであったが、この頃、マスコミが各種の手段で調査した結果では、総持点数千五百二十五点のうち、福田は七百点から八百点、大平は四百点から五百点、中曽根は二百点から三百点、河本は百点以下というのが大勢であった。しかも、福田は上昇機運にあり、大平は下降気味で、中曽根がその大平を急追しているというのが大方の観測である。

大平陣営にとって最大の問題は、大平を支持する国会議員数が福田陣営の倍以上であるにもかかわらず、何故、予備選では福田が大差で優位という予測が出るのかということであった。さまざまの調査結果を分析していた大平陣営では、中央のみならず地方にいたるまで有権者の多くが大福体制の成果を認め、その結果が現職の福田総裁への支持となつてあらわれているという結論に達した。とすれば、大福体制を肯定したままでは予備選挙には勝てない。戦うなら、決断の時期は早い方がよい。大平は、同士たちからそう進言された。

他方、福田周辺も、福田が圧倒的に有利だとは言つものの、時日が切迫してきているのに、一向に予備選の運動指令を出さない福田にやきもきしていた。福田もまた大平との密約を一方的に破棄するという決意にまではいたつていなかったたのであろう。側近たちはこれを「予備選までには話し合ひで福田に一本化するらう」と解釈していた。

予備選では、投票用紙の候補者欄に 印を記載し、これを郵送することによって投票が行われる。この投票用紙は党本部から都道府県連に一括して送られ、そこから有権者に郵送される。告示の十一月一日から有権者への郵送が始まるとすれば、投票用紙が有権者の手許に渡るのは、十一月五、六日頃であらう。投票はそれから始まり、予備選の開票が行われる前日の二十六日までには到着していれば有効とされた。投票期間は二十日間、その間候補者は十五回まで遊説できることになっており、候補者の運動と投票が重なる変則的な選挙であつた。

田中が大平に対して、行動の開始は遅くとも十月十日と言ったのは、こうした投票方法による投票のピークを十一月十日とし、それまでに全国の党員党友の末端まで運動を浸透させるには、全力を上げて一カ月をはかると見たことによる。

そしてその十月十日付けの『読売新聞』は、自民党員一万五千人を調査した結果として、福田九百点、大平三百七十点、中曽根二百二十九点、河本二十九点という予測を報じた。大平陣営では、これを分析した結果、党員の大平系が九〇%、田中系が八〇%大平支持に固まれば福田と互角に戦えるという結論を得た。

十二日には、鈴木善幸、斎藤邦吉、佐々木義武の三幹部は私邸で大平幹事長と協議を行い、臨戦態勢を確認するとともに、宏池会のメンバーを一齐に選挙区に帰郷させて、予備選の運動に取りかかることを決定した。しかし、大平もまだ戦闘宣言を打ち出さなかった。

十三日になって大平は、「大福体制の終了と新政治勢力の結集」という表現ではどうだろうか」と言い出し、側近の意見を求めた。これは一見厳しく見えるが、大福関係を全面的に拒否したものでないため、大平周辺はなまめると考えたが、翌十四日に行われる徳島の政経文化パーティーを機に、記者会見の場での方針を打ち出すこととした。

その前夜、中曽根総務会長から、極秘裡に大平に会談したいという申入れがあり、ホテルオークラの一室で八時過ぎから一時間二十分近くにわたって会談が行われた。大平は会談後、側近に、「中曽根君は大福密約があるかどうか教えてほしいということだった。ボクは、大福密約はないこと、総裁公選が終わったら、党には人材が乏しいのだから、キミもボクも然るべき地位を占めて協力してやって行けばよいと話した」と語った。のちに中曽根はこの会談について、「大平さんは七月頃からの福田さんとの会談の内容を順を追って説明し、福田さんの口ぶりが次第に変わっていったことに腹を立てていた」と語っている。中曽根が会談で大平に確認したかったのは、もし大福密約が存在しているなら、自分が立候補声明を行っても、二階に上がっ

て梯子をはずされるような窮地に陥ることを恐れたためだったと推測される。

十四日、徳島における記者会見に臨んだ大平はまず、「大福体制のもとで参議院選挙を勝ち抜き、党改革も進めてきた。内政外交の懸案も着実に処理し、当面の責任を果たしてきた」とその成果を強調したあと、「大福体制は、こんどの公選で新しい政治勢力が出来ることによって有終の美を飾る協力体制であった」と述べて、臨時国会閉幕によって政治休戦がその役割を終えるという考えを表明した。

国会終了日の二十日、大平は参議院本会議後の夜八時、福田首相を野沢の私邸に訪ねた。二人だけの一時間二十分にわたって行われた会談で、大平はまず、立候補せざるえない自らの立場を述べ、「明日二十一日午前に同志が推す総会があり、私も出席してあいさつを述べるので諒承願いたい」旨を伝えた。大平は、このぎりぎりの時点で福田から、不出馬の意思を聞くことを期待していたのであろう。しかし、福田は、自民党安定のために大福間の信頼関係がひきつづき必要であることを指摘し、大平の出馬の申し出を諒承したものの、ついに自分の進退については触れず、自分を信用してほしいと言い、ただ二点の注文をつけたと言われる。一つは、立候補者の所信を打ち出す政策についてであった。これについて両者は、「具体的になると抜きさしならない事態になりかねないので、政策や論争は考え方の方向や人柄をうかがわせる程度にとどめ、選管委に判断を求める」ということで合意した。もう一つは、二十一日午前、大平を総裁に擁立するため、大平派の総会とわざわざ時を同じくして開かれる田中派の総会に大平幹事長が出席し、出馬のあいさつをして協力を求めるという段取りを自粛してくれというものであった。大平はこの点についても受け入れた。どのようなニュアンスのやり取りだったかは明らかではない。しかし、この条件が大平の選挙運動を著しく不利にすることが明らかであるにもかかわらず、大平がそれに同意した裏には、大平が期待を寄せるに足る何らかの言明が福田首相からあったものと推測される。

大平は、その夜院内での記者会見後、宏池会の事務所で大福会談の成行きを独り待っていた鈴木善幸に、

翌日の田中派の総会に代理出席するよう依頼した。日頃温厚な鈴木もこの時ばかりは声を荒らげ、大平にむかって「まだそんなことを言っているのか。田中派の総会には絶対にキミが出なければだめだ……」と強硬に代理出席を断つたので、大平もこれを認めざるをえなくなつた。その深夜、大平は自ら福田首相の私邸に電話し、「田中派の総会に出ざるをえない」ことの諒承を求めた。

もう一つの福田との約束である立候補の所信については、大平が自分で執筆していた文案を宏池会の関係者に示したが、その趣旨は、二十日の大福会談における申合わせと全く一致していた。それは政策でもなければ、総理・総裁の座を目指す戦いの檄文でもなく、自分が総裁選に立候補せざるをえない立場や考え方の表明に過ぎぬものであり、これを見た小川平二ら宏池会政策委員は、いったい大平は闘う気があるのかと激怒した。

要するに、大平と福田の両者は、両陣営が決戦に向けて走りはじめたにもかかわらず、いまだに及び腰の域を出ていないと見えた。二十一日午前のホテルオークラにおける宏池会総会で総裁公選擁立の決議を受け、たあとの大平は、記者会見で、ことさら氣勢をそらすような答弁に終始した。

「公選に臨む抱負は？」

「この公選は党再生の第一歩だ。したがってこの公選を通じ、権威あるリーダーシップを確立して行くことである。それにふさわしい選挙戦を展開せねばならないと思う。しかし、党内のことだからおのずと限界があることも承知している。党の結束を守り、基本的信頼関係を維持し、政策のフレームの中で、自らの政策を最大限に示して理解を求めて行く」。

「福田氏との争いになるのか」。

「争いという言葉のニュアンスだが、リーダーは一人だ。何人もいるわけではない。それをどう選択するか、が有権者の判断だ。素直に判断をゆだねることではよいのではないか。争うというよりむしろ、そうした

有権者の評価を競うということではないか。そついつ信頼関係には何らの影響もない。あつてはならない」。

「福田氏との違いは」。

「福田さんにチャレンジするのではなく、自民党のリーダーシップにチャレンジしている。任期満了だから候補者は平等のスタートラインに立っている。福田さんにチャレンジするとは受けとっていない。個性はそれぞれ違う。違いを言えと言つてもむづかしい。皆さんの方がよく知っている。福田さんがもし立つたら、フェアに争い、個性をはつきりさせて然るべきだ。それをフェアに有権者に判断してもらつ」。

前日の福田の要請にあまりにも忠実な大平発言であつた。

一方、大平幹事長から出馬の意思を示された福田首相は、事の成行きに困惑したらしい。福田は、大平・福田会談の翌二十一日、私邸に腹心の塩川正十郎を呼んで、「大平君がきて、公選をやらざるをえなくなつた。すつかり構えてしまつてゐるんだ。よわつた」と言つたといふ。それでも福田は塩川に対して、公選に対する指示を何も与えなかつた。

しかし、それから三日たつた十月二十四日の朝、瀬田の大平邸に一本の電話がかかつてきた。福田首相からである。新聞記者に囲まれて雑談していた大平がちよつと顔色を変えて、電話に出た。

短い、一分もかからない電話を終わつて、大平は椅子に座つた。顔色が青ざめていた。

記者が「誰からの電話ですか」と聞いても、大平はしばらくは返事をせず、少しして、「自分にはどうしてもふつ切れないシャイな弱さがあるけれども、吉田（茂）さんの妥協しない強さには惹かれてゐるんだ」と、記者たちにとっては謎めいた言葉を残し、そそくさと立つて奥に入った。その日から総裁公選が終わるまで、大平邸の居間には、吉田元首相の「善者不弁、弁者不善」という色紙の額が掲げられた。

大福体制成立以後、次第に再選への意欲を強めつつも、大福間密約が自分を厳しく律していることを自覚

していた福田が、どうしてそれを破ることになったか。そこに信義の問題を指摘することは容易だが、より根本的には、次の三つの理由が考えられる。

第一は、密約そのものの性格の問題である。これまでしばしば述べてきたように、「福田二期二年」で大平に交代という内容の密約は、政権を私議することになるため、口頭で行われたものであり、したがって文書には書きこまねず、これが守られないからと言って、公には、何の異議を唱えようもなかった。このことは最初から大平もよく承知していた。すでに戦後の日本の政界には、明文化された政権禪譲の約束さえホコにされたという実例がよく知られていたのである。だからこそ、大平は、福田に信義を尽くすことによって協定が守られることを期待したのだが、一方、そこに密約の核心が書かれていない文書がつくられたことが、福田に、次第に自分の再選願望に都合のいいように密約を解釈する傾向を強めたとも見られる。

第二は、福田の周辺のほとんどが密約の縛りについて知らなかったということである。総裁の座を福田に譲った大平の方は、派内を納得させるため、何らかのかたちで周辺に密約の内容を知らしめる必要があったが、福田の方には、直ちにそうする必要はなかった。福田周辺に、大福体制のかなり早くから、福田二期四年説や大福表裏三年説が流れたのも、また、解散・総選挙で福田再選を確実にしようという動きが出たのも、このためである。大福密約の精神を厳格に守ろうとするならば、福田はこれらの動きを制止すべきであったろうが、福田の再選願望は福田にそれを許さず、むしろ福田を、それを歓迎する方向へ傾斜させたと考えられる。

しかし、福田は大福体制の一方の柱である大平との合意なしに、再選への道を進むわけには行かなかった。そこから、政治休戦後、十数回もの大福会談が行われることになるわけだが、問題は、この会談のやり取りの内容であり、これが第三のポイントである。

会談の具体的内容は推測するほかはないが、おそらく両者に共通していたのは、大福間の決裂は、党にと

つて、さらには国政にとって重大な事態を惹き起こすという認識であつたらう。福田がたびたび口にした「大福が争えたいへんなことになる」という言葉は、彼の正直な気持ちであるだけでなく、大平の心境でもあつたにちがいない。しかし、その共通認識が、両者間の率直なコミュニケーションを妨げる結果となつたとは言えないだろうか。

こういう場合に、政界ではよく、コミュニケーションの媒介者が用いられる。大福間にも、そのような媒介者が確かに存在した。しかし、その人物がその役割を果たしえなかつたことは、大平と福田の二人がぎりぎりまで相手の究極的な意思を誤解していたことから明らかと言えよう。

電話があつてから二日後、福田は人を介して、「大平君に大変すまないことをした。是非、会つて話したい」と会談を申し入れてきた。しかし、大平は「いまさらばくが福田さんと会う必要があるのか……」とこれを退けた。

会談を拒否した大平幹事長には、今までのようなためらいはなかつた。天に問うた答は全力をあげて戦えということである。こうして大福間に残された最後の一本の細いカスガイがはずされたのである。